



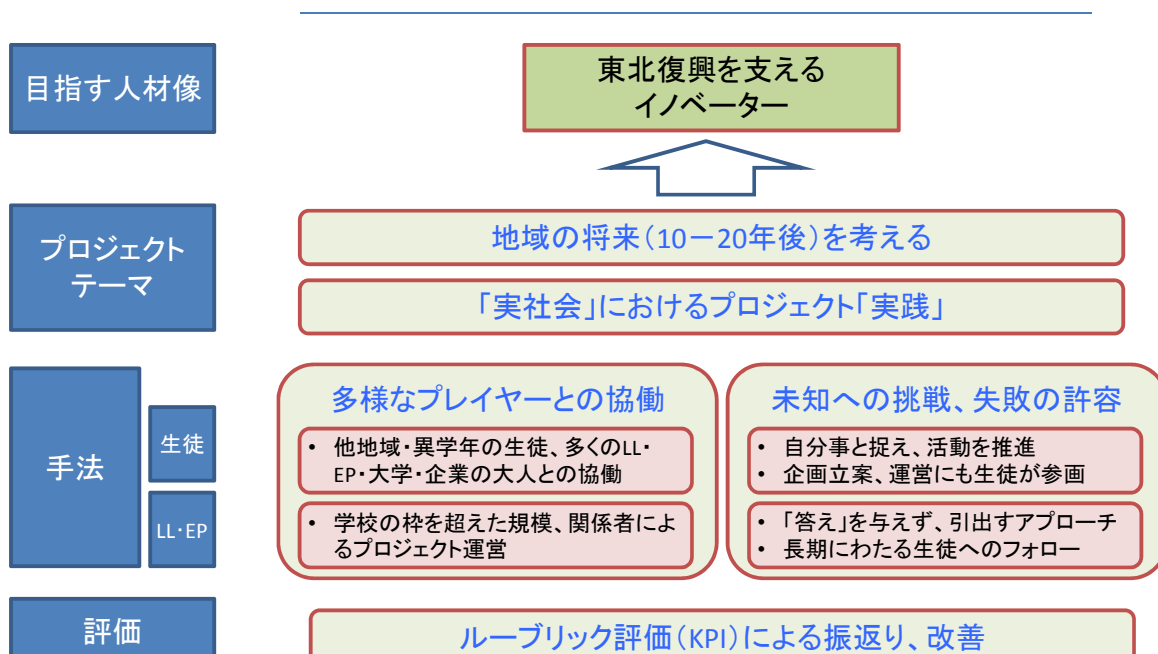
## OECD東北スクールの取組とその教育効果： 政策への示唆と今後の取組

福島大学 三浦浩喜



# 1. OECD東北スクールにおける プロジェクト学習の特徴

OECD各種エビデンスを基にデザインされたプロジェクト学習の成果を、以下の5つの観点で整理する。



## 2. 主なポイント と 成果

各項目において、プロジェクト学習としての効果を創出  
(**人格形成**+**コンピテンス**+**関連する教科的知識**)

		主なポイント	主な成果
地域の将来 (10-20年後)を考える		<ul style="list-style-type: none"> <li>自らの地域の可能性を見つめなおし、地域の将来を考えることをテーマに設定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒のコミットメント、自立心、長期にわたって考え抜く姿勢の獲得</li> <li>同じ思いをもつ地域、企業の巻き込み、連携</li> <li>2030年を考えるための社会・経済問題に関する知識とデータを読み解く力</li> </ul>
「実社会」における プロジェクト「実践」		<ul style="list-style-type: none"> <li>あらかじめ用意された学習環境ではなく、「実社会」</li> <li>誰も答えをもっていない問いに対して、結果を追求＝「社会的実践」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>資金調達を含め、プロジェクト自体が社会の体験になり、企業・社会が求める質、手法の学び</li> <li>社会・地域への貢献・変革を目指したキャリア設計</li> <li>世界発信のために振り返った地域の歴史</li> </ul>
多様なプレイヤー との協働	生徒	<ul style="list-style-type: none"> <li>他地域・異学年・他国の生徒との協働</li> <li>LL(引率指導者)だけでなくEP(企業人)との協働</li> <li>企業・団体への協力依頼</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>他地域の生徒との協働により、自分自身、地域を客観的に捉えることができた</li> <li>多くのLL、EPからスキル習得、ロールモデルとの遭遇</li> <li>企業研究や企業プレゼンでの言語活動</li> <li>社会や公民など社会の仕組み</li> <li>他国の生徒と英語で協働</li> </ul>
	LL (EP・大学)	<ul style="list-style-type: none"> <li>長期にわたる、多くの地域・団体・メンバーが関わってプロジェクトを運営</li> <li>大人の間で運営方法、教授法について継続討議</li> </ul>	
未知への挑戦、 失敗の許容	生徒	<ul style="list-style-type: none"> <li>プロジェクトの当事者としての自覚、LL・EPと対等に議論し、地域イベント、主体的にプロジェクトを推進</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の主体性、自立心が高まり、自らアクションを起こすことの重要性の気づき</li> <li>コミットメント、モチベーションの維持</li> <li>教科横断型プロジェクト 例(数学・美術ードミノ設計の計算、美術・国語一ロゴ作成)</li> <li>生徒が自分の言葉で考えられるまで、じっくり能力を引き出すことにより、主体性・自立心の育成</li> <li>環境変化、課題を乗り越えた、プロジェクト継続</li> </ul>
	LL (EP・大学)	<ul style="list-style-type: none"> <li>大人から答えを与えず、生徒の意思・主体性を引き出すアプローチ+徒弟制的アプローチ</li> <li>長期にわたる生徒・保護者・学校へのフォロー</li> </ul>	
ルーブリック評価(KPI) による振り返り、改善		<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒に求めるコンピテンシーを事務局、LL、EPが協働で設定</li> <li>定点観測し、途中での振り返り、対応策も検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>評価結果をプログラム設計に活用</li> <li>LLもこの評価方法が学校でも有用であると認識</li> <li>生徒が自分自身の成長をメタ認知</li> <li>生徒が自分自身の知識の欠如をメタ認知および知識習得へモチベーション向上</li> </ul>

2

## 3. 生徒の成長を測るルーブリック評価の実施 (プロジェクトとしてのKPI※設定)

・ OECD東北スクールとして、生徒の成長度を測定し、プログラム検討に活用した。

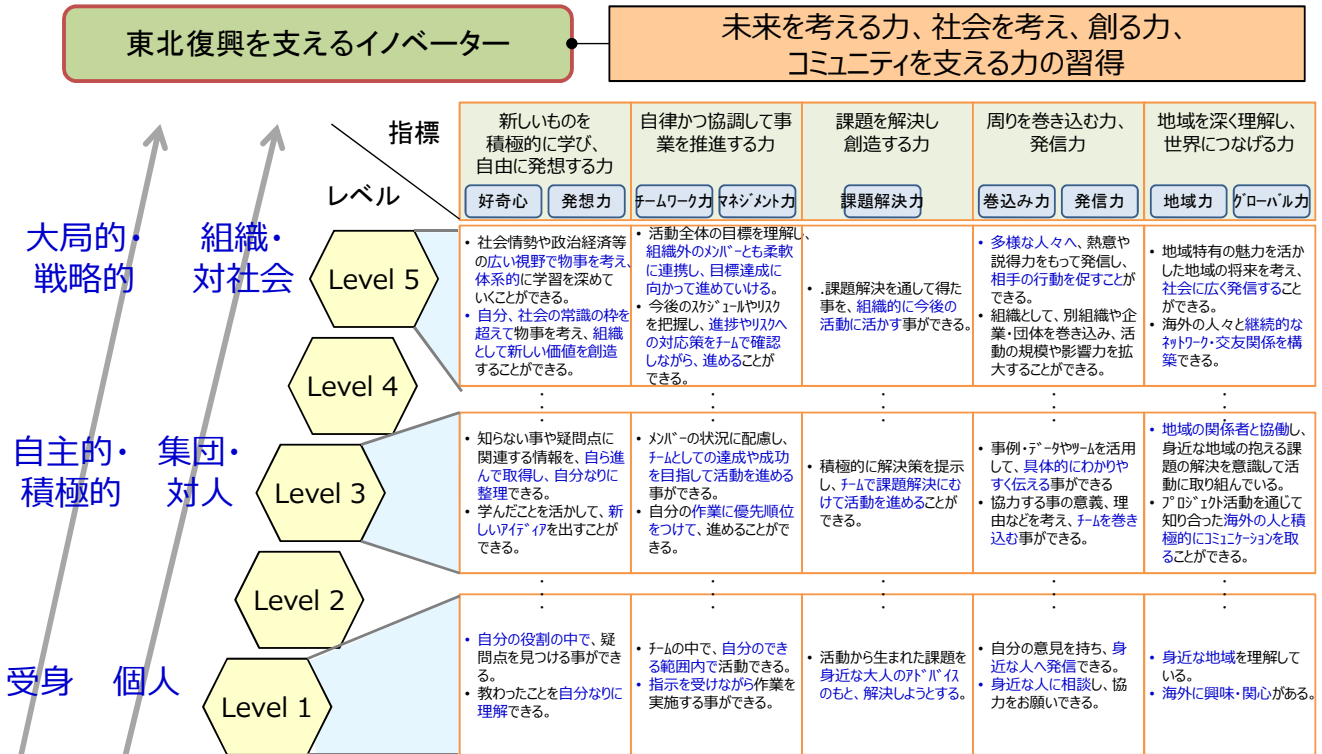
- ・ OECDキーコンピテンシーをベースにして、LL・EP・事務局が熟議を重ね、「東北復興を支えるイノベーター」に求められる要素を定義し、指標を設定した
- ・ 生徒の自己評価に加えて、LL・事務局によるフィードバックを行い、絶対評価を行った
- ・ 成長度に加えて、成長要因についても調査しており、重回帰分析などの手法により、分析を実施した
- ・ 2014年3月に中間測定を行い、その分析結果をパリエントまでの期間におけるプログラム設計に活用した
- ・ イベント終了後に測定した最終結果を、第2期のプログラム設計に活用していく予定

※KPI: 重要な達成度評価指標 (Key Performance Indicator)

3

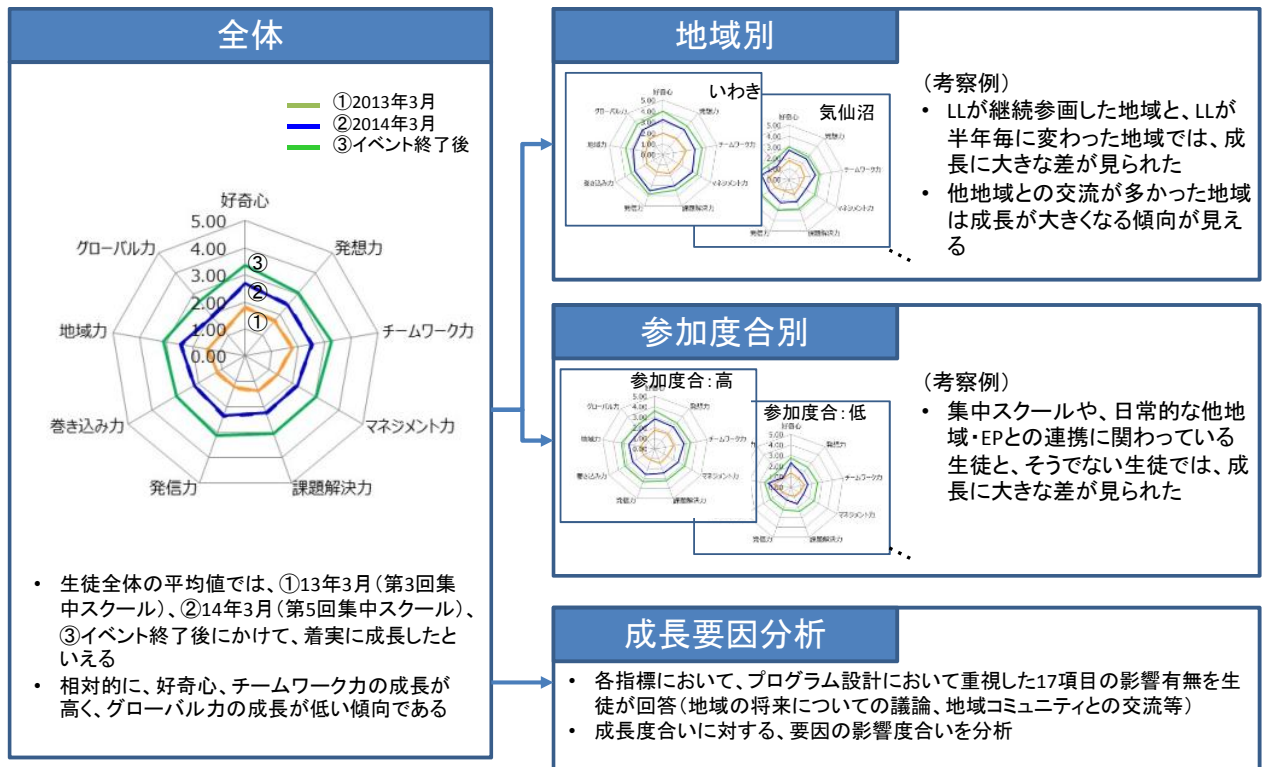
# 4. 評価項目、レベルの定義

- 9項目の指標を設定し、5段階のレベルを絶対評価として定義した。



4

# 5. 分析の概要



5

## 6. 生徒のコンピテンシー向上

---

### 9つの KPIのすべてにおいて大きな向上

- 1) **好奇心**: 知らないことへの抵抗感・拒絶感がなくなった、積極性が増した
- 2) **発想力**: 話し合いの中で新しい発想を生んだり気づくことができるようになった
- 3) **チームワーク力**: 広域にわたり、異学年、異世代で協働できるようになった
- 4) **マネジメント力**: 役割分や計画を明確にし、連絡やチェックする癖がついた

6

## 6. 生徒のコンピテンシー向上

---

- 5) **問題解決力**: 粘り強く議論し、問題を解決しようとするチームができた
- 6) **発信力**: ICTや言葉、グラフィックなどを多用し広く発信した
- 7) **巻き込み力**: イベントに誘ったり PR活動を通して協力者を増やした
- 8) **地域力**: 何も感じなかった地域が好きに、地域の可能性を考えられるようになった
- 9) **グローバル力**: 国外も地続きの地域と考えられるようになった

7

## 7. その他、生徒の変化

---

### コンピテンシーに留まらない「人格形成」

- 「成長期」と「復興期」の重なり。反省性の深まり、レジリエンス(復元力)、ノブレスオブリージュ、人間的魅力、ユニークさ、
- 成長要因:他地域の生徒との交流、地域の未来に対する議論や活動、異学年の生徒との交流、他国の生徒との交流
- 地域ごとに異なる成長パターン。どれだけ「異質性」と出会ったか、受け入れたか
- 自分の進路を見つける-ロールモデルとの出会い。海外留学、大学進学、将来の夢.....

8

## 7. その他、生徒の変化

---

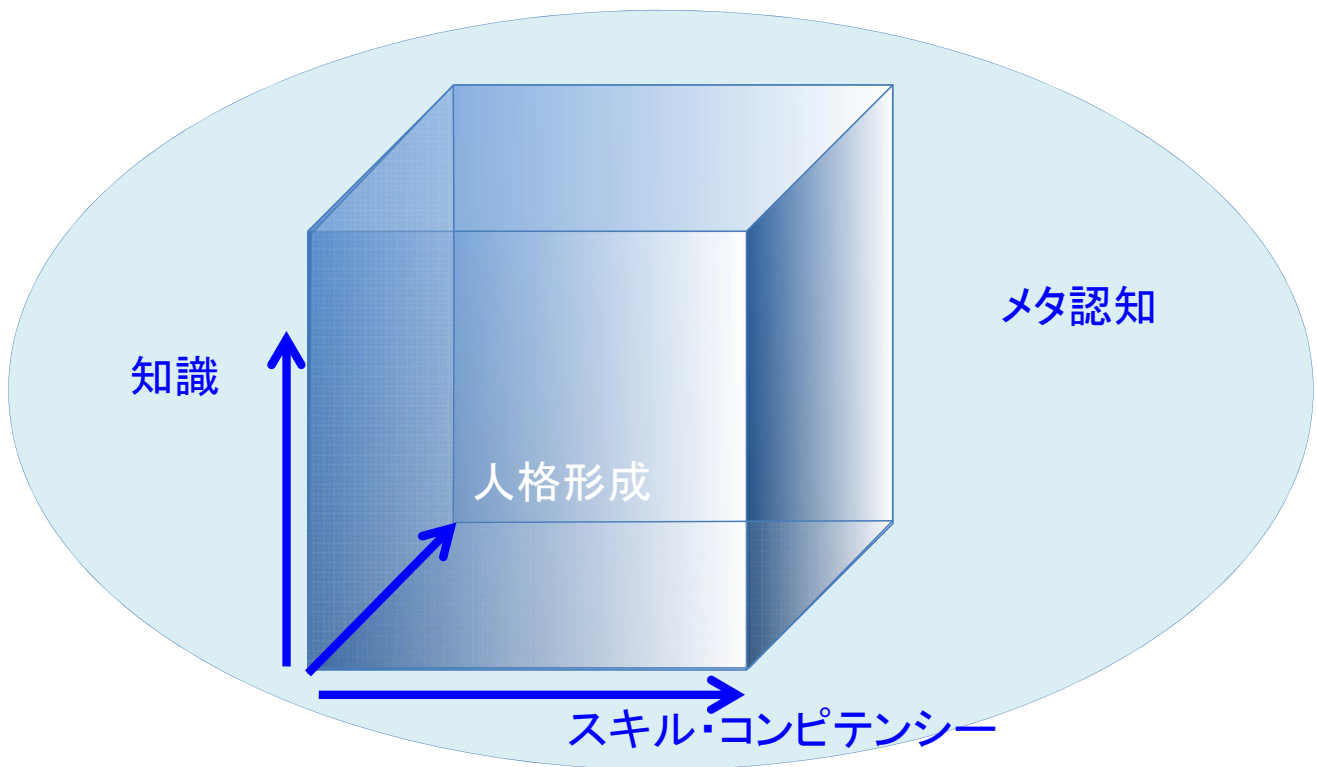
### コンピテンシー及び人格形成と相乗効果で 伸びる「知識」向上

- 世界発信をするに当たって、自分たちの地域・国について何も知らないと自覚。地域や国の歴史など、学校でできないことができるとしながらも、学校で知識を学ぶ重要さを自覚し勉強
- 学校で学んだ知識を、自分でたてた計画実施のために、教科に関わりなく実際に「使う」(例、ドミノ実施のために、数学の知識と美術を使って、全体及び各ピースの計算しドミノピース作成。物理の知識を使ってリハーサルを重ねるなど)

9

## 8. 東北スクールから示唆： 後継事業のカリキュラムフレームワーク(案)

---



10

## 9. 教員の変化

---

### 教育実践フィールドの拡大

#### —学校と社会の境界を越える—問題解決力の向上

- ・学校の対象化—学校の課題と社会の課題のズレへの気づき
- ・校種を超えた連携、基本は生徒との対話的パーソナリティ
- ・自分が知らないこと、できないことへの拒絶、「古い教師文化」克服の必要性

11

## 10. 東北スクールから示唆する教育改革

---

### 「解のない問い」へのチャレンジ——10年先の安定よりも30年先の危機回避を

#### ① カリキュラム

- インプット(教員が何をするか)でなく、アウトカム(生徒が何ができるか)で目的設定
- コンテンツベース・オンリーからの脱却—  
A)コンテンツのスクラップ&ビルト? B)コンテンツ横断コンテンツ開発? C)新たなコンテンツ導入?
- コンピテンシーベースの教育を—アクティブ・ラーニング導入強化—A)カリキュラム&課外カリキュラムとの連動・充実?  
B)一つの学校教育&他校との協働教育(国内外)?
- 人格形成—パフォーマンスのいいロボットをつくればいいのではない

12

## 10. 東北スクールから示唆する教育改革

---

#### ② 指導法

- 新しいカリキュラムを実施することのできる教員の指導力
- 生徒の成長要因=異質性との接触によって化学反応を起こす(立場、地域、世代、.....創造的混乱)化学反応の結果が知りえない場合のリスク・「創造的混乱」をマネジメントするカー  
A)リスク回避型教員? B)リスクシェア型教員?

#### ③ 生徒評価

- 知識以外の力(コンピテンシー&人格形成)を、どう評価するか。  
議論の争点 A)定量・定質 B)客観・自己評価 C)総括的評価・形成的評価など
- ルーブリック評価=カリキュラムと重ねた場合、評価実施に有効

13

## 11. 後継プロジェクト

---

### 地域創生イノベーションスクール2030

- ① 世界と協働。日本よりは、東北他、和歌山・広島などから地域の参加、及び、高専から参加を検討中。
- ② 世界共有の2030年の社会・経済課題をテーマ： 先進国が今後深刻化する地域課題（人口減少、少子高齢化、環境、エネルギー、国際化……）
- ③ 事務局（産学コンソーシアム）はOECDと共同研究予定（例、OECDキーコンピテンシーの再定義、21世紀型ペダゴジー開発、21世紀スキルアセスメント開発）



# OECD東北スクール人材育成要件・ルーブリック

アセスメント(5段階) 高校生 1.普通 3.クラスに一人レベル 5.県・地域で1人レベル

	新しいものを積極的に学び、自由に発想する力		自律かつ協調して事業を推進する力		課題を解決し創造する力	周りを巻き込む力、発信力		地域への深い理解と世界への展開	
	好奇心 新しいものを積極的に学ぶ力	発想力 自由に物事を発想し、創造する力	チームワーク力 自律かつ協調して人と事業を行う力	マネジメント力 事業を推進・管理する力	問題解決力 自分の意見・考えを積極的に発信する力	発信力 自分の意見・考えを積極的に発信する力	巻き込み力 周りを巻き込む力	地域力 地域の宝・魅力を理解し発掘する力	グローバル力 グローバル標準を理解し、展開できる力
1	学校の授業にて新しい知識を得るもしくは聞く。	学んだことを理解している。	決められたことや指示されたことを一人で行う。	指示を受けながら作業を実施。	課題があることは認識している。	有用な情報、自分の考えを自発的に、身近な人に発信する。	身近な人に相談する。	身近な経験をもとに地域の特徴・特産を理解している。	海外・他国に興味・関心がある。
2	自分の範疇の努力で新しい知識を得る。(例:本、家族、ネット)	自分の考えを持っている	身近に助けを求め、かつ身近なメンバーの支援もできる。	指示を待たず、自発的にかつ自分の作業に責任を持って実施。	目の前の課題の原因を追究し、解決策を考えられる。	自信を持って、わかり易く身近な人に発信する。	身近な人を巻きこむ・動かすことができる。	歴史や地域のバックグラウンドを深掘りして学び、理解している。	海外・他国を意識して活動に取り組んでおり、海外・他国の情報・知識を、自分の範疇の努力で得ている。(例:テレビ、本)
3	自分の範疇を超え、門戸を叩いて教えてもらいに行き、新しい知識を得る。	新しく学んだことや他者の意見を自分の計画・アイデアに反映させる。	身近なメンバーの中で共通の目標に向かって、タスク等を調整しながら進める。	全体にとって必要な作業を見出すことができる。	目の前の課題を、当事者間で議論をし、解決策を合意できる。	自分の範疇を超えた様々な人々へ、発信する。(例:企業へのプレゼン、EPへの投げかけ)	企業やNPOへ協力を働きかける。	自分の地域の特性を理解し、復興・貢献を意識して活動に取り組んでいる。	海外・他国の情報・知識を直接的に得ている。(例:現地言語の文献を読む、現地語でコミュニケーションする)
4	習得した知識を深掘りし、周辺情報や関連情報を集め理解する。	自分のアイデア・計画を具体化し、実現に向けて進める。	共通の目標に向かって多様なメンバーと連携してやりきる。(例:大人との協働)	作業の繋がりを、全体スケジュールを意識し、チームやメンバーの作業の進捗を管理できる	複数の課題の優先順位をつけ、解決策を考えられる。	自分の範疇を超えた様々な人々へ、自信を持って、わかり易く発信する。	企業やNPO人々から協力を得る・巻き込む事ができる。	自分の地域と、他地域や海外との繋がりを理解し、外からの目線を意識して活動に取り組んでいる。	海外・他国の情報・知識を理解し、それに対して自分の意見・考えを発信できる。
5	俯瞰して体系立てて情報を整理し、人に説明できるレベルまで理解する。	まだ誰もやっていない、もしくは多くの人に影響を与えられる計画を立てる。	別チーム、別プロジェクトとも連携し、最適解に向かって進めていける。	事前にリスクを把握して、課題を先につぶすことができる。	課題解決を通じた経験を、新しい取り組みに結びつける。	多様な人々へ、腑に落ちる形で説得力をもって発信し、共感を得る。	相手の利害関係・立場を理解し、Win-Winの関係を構築する。	地域の魅力を活かした地域の将来を考えることができる。(ビジネスモデル)	海外・他国の人々と継続的なネットワーク・交友関係を構築できる。